在を厭ふと云ふやうなことが我國人に適したと云ふのは御承知のやうに隨分戰爭が續き色々と人民を苦めるやうなことがあつて、おのづからかういふ傾を生じた所へ厭ふべき此世の中を捨てゝ西方の淨土に往つて阿彌陀の懷に抱かれると云ふ敎が起つたゆゑそれがなか〳〵盛になつて來ました。

それからもう一つの方は禪であります。これは所謂超絶的で此世の中の紛々擾々を去つてしまつて、行ひを澄し總てのことに悟を開き奇麗薩張りと此世から脫却するのであります。鎌倉の武門、武士が禪に歸依した原因は矢張り戰爭その他の現世の苦から脫却する爲めであります。當時の世の中は戰爭なり、或は政治なりその他總てのことが實に複雜で紛々擾々が絶えない。そこで禪に依つて總てのことを脫却しようとしたのである。決して之に依つて一般の國民に卽心成佛とか、娑婆卽寂光土とか云ふことを具體的の意味で悟らしめると云ふことよりも、寧ろ自分自らが悟つて厭はし

い苦患から脫却すれば宜いと云ふので武門武士が多く禪に歸依するやうになつたのであらうと思ひます。されば是が果して日本人の性格に適當したことであるかといふと私はどうも不自然ではないかと思ひます。日本人は前にも申しましたやうに單純の生活をして來た島國民であつて、大陸との面倒な關係もない。さうして獨立して色々の特色を發揮して來たと云ふことが日本人の一つの特色であります。それが今のやうに世の中を厭ひ、さうして未來を大そう樂みにするとか、或は又自分だけが悟つて世の中の紛擾から遠ざかるやうにすると云ふのはどうも不自然ではあるまいかと思ひます。兎も角もさう云ふやうな時代に日蓮上人は呱々の聲を揚げて房州の邊鄙に御生れになつたのであります。そこで上人が色々と研究せられた結果、終にあの通りに思想を開拓されたのでありますが。其經歷は諸君の御存知のことで今改めて御話する必要はないと思ひます。そこで上人の得ら

れた特色、斯う云ふ時代に御生れになつた上人がどう云ふ特色を以て世の中に立たれましたか、日本人の我々の思想史に於てどう云ふ關係を有するであらうか、是からが私が主として御話したいと思ふ要點であります。

先つ第一に上人の思想は統一的であつたと云ふことであります。是は他の講師からも屢々御話になつたことでありませうから、詳しくお話するまでもありませぬが、一體此の頃は統一と云ふことをよく申しますが、動もすると之を以て唯多くの物を一緒にすると云ふことゝ混じてしまふ虞れがありますから、私は特に此處にその意味を明にする爲に私の用法をお話して見やうと思ひます。卽ち統一とは唯同じ物を結合する意味ではない。假令多くの違つたものがあらうと、それに一貫した同じ目的を有つて括るのであります。それゆゑたゞ違つたものを多く一緒にしても、それは統一ではありません。同じ目的がそこに存して假令外形に於ては非常に違つて居

つても其の根底にずつと一貫した同一目的がなくてはなりません。それですから相から言へば種々雜多の差別がありますけれども、體から言へば一貫したものであります。此の事實は誰の思想にも多少存せぬことはないのですが、日蓮上人の思想に於て特に著しい特色として表れて居ます。何を以つてさう云ふかと云ふに、それは色々のことに表れて居りますが、概して言へば上人の思想總てが統一と云ふことで一貫されて居ると云うても宜い。其の內で上人の說かれた御本尊と云ふことの考へが最も統一的になつて居る。併し始めて御本尊を拜する者は、一寸怪み惑ふでせう。佛樣の名が多く書いてあつて、眞中に南無妙法蓮華經と記してあるのは、何のことか無駄書でもしたのではないかと思ふ程でせう。意味を知らずに初めて見ると殆どさう云ふ感を有つて見るでありませうが、上人の書かれた遺文錄をよく讀み又法華經を研究して見ると、本尊と云ふものには非常に意味が

ある。私が言ふまでもなく、本尊が深遠の意味がなければ宗教は成立たぬけれども、上人の本尊觀に於て殊に明に著しく分るのであります。上人の書かれたものゝ中に、次の文があります。

法華經壽量品に曰く、或は己身を說き或は他身を說く等云々東方の善德佛、中央の大日如來、十方の諸佛、過去の七佛、三世の諸佛、上行菩薩等、文殊師利舍利弗等、大梵天王第六天の魔王釋提桓因王、日天月天明星天、北斗七星二十八宿、五星七星八萬四千の無量の諸星、阿修羅王、天神地神王、山神海神宅神里神、一切世間の國王とある人、何れか教主釋尊ならざるや、天照太神八幡大菩薩も其本地は教主釋尊也。例せば釋尊の天の一月、諸佛菩薩等は萬水に浮べる影也。釋尊一體を造立する人は、十方世界の諸佛を作り奉る人也。譬ば頭を振ばかみもゆるぐ、心はたらけば身動く、大風吹ば草木しづかならず、大地動かば大海さはがし。

教主釋尊を動かし奉れば、ゆるがぬ草木や有べき、さはがぬ水やあるべき。(日眼女釋迦抄)

上人は斯う云ふ風に說いて居られる。世界の神、或は佛は悉く久遠本佛の顯現されたものである。佛教では差別卽平等、平等卽差別と云ふことを說きますが、是で總て表すことが出來ると思ひます。世界の宗教を大きく分けると唯一の神を信仰する猶太教、耶蘇教等のものと多神教或は詳しく言へば交代神教、卽ち換り代りに色々な神を拜む宗教と云ふ風に分けることが出來ます。佛教殊に日蓮宗も交代神教ではないか、色々の佛樣がある ではないかといふ人があるかも知れませぬが、實はさうではありません。交代神教は全く別々の神なり佛なりを立てるのでありますけれども、日蓮上人の教はさうではない。佛は澤山あつても、釋尊の一體の顯現であるから、多神教ではない。それゆゑ私は詳しく宗教を分けるならば統一神教を

立てなければならぬと思ひます。無論其の意味からいへば唯一神教であります。けれども耶蘇教のやうな意味の唯一ではなく、多くの理想が一つの目的の下に統一されて居る。――目的と言うて宜いか。本體と言うて宜いか、即ち久遠本佛の下に統一されて居る。日蓮上人は明にそれを御説きになつたのでありますから、此統一といふことを上人の特色として擧げてよいと思ひます。是で統一と云ふことの意味は最も明瞭になります。これは單に信仰の方面のみではなく、吾々が今後總てのことを行うてゆくに統一的の考へがなければなりませぬ。上人はそれに最も完全なる模範を示されたものと思ひます。

唯斯の如く本尊に於ける統一と云ふことが、上人の妙判に由つてよく表れて居るのみではない。上人のすべての思想は統一であります。上人は現象と實在とを統一し、或は國家と個人とを統一し、或は積極と消極とを統

一せられました。斯の如く一たび上人の人格に觸れると世人が別々のものを全く違つたものと思つて居ることも衝突なしに統一せられて立派に解決せられ實現せられて行くことの出來るやうになつて居るのであります。先づ此のことは是だけにして置きます。

次ぎに上人の思想は總てが積極的であります。諸君も御承知の通り、總てのものは積極と消極との區別を立てることが出來ます。積極、消極と云ふのは素と電氣或は磁石から來たことでありまして、一方を陰とすれば、一方を陽とするといふやうに兩極を立てるのでありますが、先に御話致しましたやうに、上人の世に出られる前の佛教は概して消極的の傾きを有つて居りました。即ち世の中には苦しいことが多い。そこで其の苦しみを除いてやる。或は此のやうに苦しい世の中であるから、此を去つて極樂に往き安樂をさせてやるといふやうにすべて消極的でありまして、進んで苦し

い世の中を樂しい世の中にしやう、此の娑婆を寂光淨土にしやう、此の煩惱を菩提にしやうと云ふ發動的精神でなくして、受動的、消極的のものの みであつたと云うても過言では無いと思ひます。然るに上人の說かれることは何時も積極的で決して消極的悲觀的のことがない。勿論中には「日蓮は泣かねども涙暇なし」などと言はれたこともありますが、それは畢竟進んで衆生の迷を積極的に取り去つてやらうとの大慈悲から起る所の積極の涙であります。自分には出來ぬと言うて泣く涙ではありません。此のことは何時も我々が宗敎の話でなく日常生活や思想の上に於て最もよく考へねばならぬことです。吾々は何事でも積極的の方針を有つて進んで行かねばなりません。日蓮主義と云ふのは積極主義です。戰爭をするにも積極的態度を以つて進まねばなりません。又學問をするのでもさうであります。その他何をするにも積極的態度を取つてゆき、苦しいからそれを逃れる爲めにすると云ふのでなく、苦に打ち勝ち樂を得る爲めにするのです。例へば休むにしても積極的態度を取つて休まねばなりません。私は世界の總ての傾向が此の意味に於て日蓮主義になりつゝあると思ひます。何故かと云ふと戰爭などのことでも、初めは防ぐと云ふことを土臺として戰術を講じて居つたのです。然るに、千八百七十年佛蘭西と獨逸との戰爭以來、防ぐと云ふことを土臺にしてはならぬ。どうしても攻擊をすると云ふことを主としてやらねば戰爭には勝てぬと云ふことが分つて來ました。そこでどんなに敗けた時分でも、又人數の少ない場合でも乘ずべき隙さへあらば、攻勢を取ると云ふことになつて來ました。吾々日常の修養にしてもすべて積極が大事であります。日蓮上人が六百餘年前に於て悉く積極的に進んで居られると云ふことは、大に吾々が注意すべきことであると思ひます。

それから第三は日蓮上人の總べての思想が國家的であることです。是は

私がお話するまでもない著しいことであります。一體宗教と云ふものは多くの場合に、國家と云ふやうなことは離れてしまつた、唯萬國共通に人間を一つのものとして說くことが多い。それ故動もすると宗教と國家とは衝突することがある。現に我々の先輩たる加藤博士は耶蘇教が我が國體と衝突すると云ふことを憂へて書を著はされました。併しこれは耶蘇教のみではない。日蓮上人の說かれた佛教以外は其の儘に說かば基督教と同じことであります。たゞ日本人は忠愛の國民であるから宗教も極端に說かずしてよく朝廷を尊敬することゝ、各自の本尊を尊敬することゝが調和して居るのであります。然らば上人の說かれたことが、何故國家的であるかと云ふと、こゝが實に吾々が特に上人を敬慕する點でありますが、上人は日本國民の天職を示されたのです。諸君の御承知の通り佛教は西の方の國から起つて東の方の日本に來ました。さうして此處に於て一番高い佛教卽ち法華

經を本とした教が弘まつて、それが又道を照すが如くに西に及んで行くべきものである。法華經は日本に弘まるべき所のものであるといふことを經文の豫言から上人が發見して確信せられたのであります。此點が特に上人の國家觀の由つて來る所で吾々の最も敬服する所以であります。

上人の說かれたことに由つて吾々日本人はその天職を明にする基礎を得たのであります。この思想は六百餘年の後に至つて、日本國民が東西の文明を統一すべき天職を有つて居ると云ふことの自覺に由つて、明になりました。事實上東洋の文明は我國に來つて極點に進歩しました。それが維新後殆ど極點に進んで居る西洋の文明と米國を通じて接觸しこゝに東西の文明を統一して新らしき文明を打ち立てる運命が我國民に降りかゝつて來ました。併し又之に反對してそれは誇大妄想である。何處の國でもそのやうなことは考へるものである。特に我國に限つた事ではないといふものもあ

る。私は誇大妄想でもかまはぬと思ふ。日本人は其の考を有つて進まなければならぬと信じます。私はかねてかういふ考を抱いて居つたのでありますが上人の遺文錄を讀んで見ると六百餘年の前にこの意味に於て日本人の天職を示されて居る。實に驚嘆すべきことである。抑も國が成り立つて居る以上はその國の存在は何の爲めであるかといふ意味がなければならぬ。その意味を知つてその目的の實現に努めるのが忠義である。されば國民たるものは必ず其の國の天職を認めて働かなければならぬ。それを日蓮上人は遠い昔に於て自覺され、我國が偉大の天職を有する尊敬すべき國である所以を教義の上から明瞭に說かれました。隨つて我國の天子の御先祖であらせられる　天照大神を久遠本佛の顯現と認めて居られます。されば上人は殊に熱烈の愛國心を有つて居られ、皇室を無上に尊敬されました。これは決して表面から來て居るのではなく、思想信仰の根底から來て居るのであります。上人の當時北條の勢は非常なものであつて、北條のことを惡く言つたりするのは實に危險でありました。然るに上人は「源平と云ふ二疋の犬が居つて王の門を守つて居る」と云ふやうなことを公然と書いて居られる。北條のことは或は公然と逆賊であると云ふことを書かれて居る。それは何處から來るかと云ふと大なる信念から出て來て居るのです。近頃倫理會に於て我が國固有の道德と云ふものに就いて色々に研究を致しました。其の時に色々感心すべき專門上の話もありましたが私の遺憾に思つたのは大切なる國家の天職を認め、そこから忠孝の出て來るやうにする說が少しもなかつたことです。そこで最後に私は日蓮上人の思想信仰から說き起して私の考を述べて置きましたが、諸君も、此の點に於て御同感であるならば、此の國家の天職を遂げる爲めに日蓮主義に由つて共に奮進したいと思ひます。

かく日蓮上人の思想は國家的であると共に又非常に個人的である。併し國家的であると言つて又個人的であると云ふと、其處に大なる矛盾があるやうであります。決してさうではありません。此處が卽ち人格の偉大な所であると思ひます。すべて我々は飽までも國家的でなければならぬと同時に又個人的でなければならぬ。併ながら世俗の所謂個人主義とは違ふ。其の肉體は個人であるけれども、それは久遠本佛の現はれである。されば其の個人の內には先程も御話したやうに色々のものが皆包含されて居る。此の個人を尊敬すべきものと說かれたのは必ずしも日蓮上人が始めて申されたのではない。併しながら個人の力を痛切に說かれたのは上人其人であると信じます。それは色々の證據がありますけれども、私は時間を節約する爲に多くの引例をすることを省きまして唯僅の部分だけ御話して置きます。諸君が遺文錄を御覽になると其の證據がいくらもあります。其の中の一つ

に斯う云ふのがあります。之を讀めば個人を如何に尊敬されたかと云ふことが證明されます。

妙法蓮華の當體とは、法華經を信ずる日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是れなり。正直に方便を捨てゝ、但法華經を信じて、南無妙法蓮華經と唱ふる人の煩惱業苦の三道は法身般若解脫の三德と轉じて、三觀三諦卽一心に顯れ、其人の所住の處は常寂光土なり。能居所居身土色心俱體俱用無體三身本的壽量當體の蓮華佛とは、日蓮が弟子檀那等の中の事なり。是れ卽ち法華の當體自在神力の顯す所の功能なり。敢て之を疑ふ可らず。之を疑ふ可らず。(當體義抄)

斯う云ふやうな意味に於て久遠本佛の當體は卽ち法華經を信ずる所の肉體が卽ちそれである。自身が其の佛であると云ふことを屢々說かれて居る。此の事に思ひ及んだならばその尊い身を以て不品行のことを行ふとか、恥

づべきことをするとか、或はその尊い自己の住んで居る所の尊ぶべき國、「八萬の國にも勝つた靈國である」と說かれたる此の國を愛せないことが出來ませうか。眞に個人の尊いものであると云ふことを知るなら、品行も方正にし、親には孝行、兄弟とは仲よくせねばならぬやうになりませう。法華經を體得すれば自然とかういふことを實現することが出來るやうになつて來るのです。斯う云ふ意味に於て日蓮上人は個人的であります。されば唯時々刻々に起つて來る自己の慾望を滿足させ、他人との關係もかまはずに盲進するやうな個人主義とは違ひます。上人の說かれたものを讀めば個人は實に尊いものである。十界が皆之に包含されて居るのであります。是は最近の思想として說く所の哲學の學說、例へば人本主義或は人格主義と全く立場が同一であります。今私の個人と云ふものを試に考へて見て、その中から國を去り、君を去り、親を去り、妻を去りその他あらゆる內容の

一切を取り去つたならば何が殘るでありませう。個人が〳〵乃公が〳〵というて居る者も其の乃公は皆他の乃公に關係して居る。大部分乃公以外の內容から出來て居る。殊に此乃公はいづれも久遠本佛の權化である。さうして見ると個人は非常に尊いものであつて決して之を辱しめてはならぬ。乃公の身心は絕對に自由だなどとは言へません。心理學上からも哲學上からも此事は說明が出來る。學生の諸君がさう云ふことを調べて見たいならばミューアヘッドの倫理學を御覽なされればよく分る。要するに日蓮上人は個人と國家とを衝突なしに一方に國家主義を唱へ、一方に個人主義を重く說かれた。これは殊更に立てられたのではない。他の信仰的根元から出て來たのであります。遺文錄を見ると所々に大衝突があるやうに思はれますが、段々溯つて見ると遂に皆一つの源流に達することになるのであります。

第四は現實的であることです。是が又日蓮主義の特色であります。元來

佛教は前に申しましたやうに、理と事との二つに分けると今までは理が多かつたのです。理の上では成程卽心成佛であり、娑婆卽寂光土でありませうが、現在の生活と離れ未來に十萬億土に往つてと云ふやうなことでありました。然るに上人の教では事實上現實の世界が卽ち寂光土となるのであります。肉體の本能が法體になるのであります。上人の教義が天台や、傳教に百尺竿頭一歩を進めたのは其處であります。一念三千論でも、事の三千論は理のそれとは違ひます。理になれば消極的である。事になれば積極的に日々行うて居る事がそのまゝ眞の一念三千であります。極樂淨土が遠い〳〵空間にあるとか、又未來の長い〳〵時間を隔つた時に現はれるとかいふのではない。現在に脚下に存在して居るのである。無論現在のみではない。久遠本佛と云ふことを說くのであるから、時間空間を超絕し何時何處にもある譯であるが、眼の前にあるのだと云ふことを眞實に說き示されたことは上人に依るのであります。此思想は最もよく日蓮上人を現すところの特色であると思ひます。玆に一つ例を擧げて申しますれば、是は法華經から出て居るのでありますが、

天下萬民諸乘一佛乘と成て妙法獨り繁昌せん時、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば吹風枝をならさず雨壤を不碎代は義農の世となりて今生には不祥の災難を拂ひ長生の術を得、人法共に不老不死の理顯はれん時を各々御覽せよ。現世安穩の證文不可有疑者也。(如說修行抄)

と云ふやうなことが說いてあります。是は解しやうに依つては形容であるとも見えますけれども是を實際に色讀すればその通りの狀態が主觀に現はれる。私は今色讀と申しました。是れは諸君も御承知でありませうが、此色讀といふのは佛教の語であるが、誠に好い言葉であります。字其儘に見ると赤く書いてあるものでも見るのかと思はれますがさうではない。色

とは肉身のことを云ふのであります。我々の體、卽ち肉身に讀むのを色讀と云ふのであります。凡そ讀み方には口讀心讀色讀の三種があります。口讀は誰でもすることで、大概の者は口で讀まぬものはありません。併しそれのみでは足りません。殊に延髓から反射して來て口で發音ばかりするやうでは少しも有難くも何ともない。心讀は一歩進んで意味が解つて心で讀むのです。通例の人がよく書を讀んで理會すれば玆まで來ます。今日の學校教育は心讀を目的として居るのですが、中には口讀で終るのもあります。さう云ふのは試驗が濟むと直ぐ忘れて了ひます。學校で行ふ試驗は大抵口讀主義であつて心讀までも行きません。然るに日蓮上人は更に一歩を進めて色讀といふことを力說されました。卽ち體に讀まねばならぬのです。法華經を身體に眞實に讀めば此世の中に上人の述べられた通りの事實が現はれるのです。

すべて上人の如き人が眞に自己が具體的に感せぬことを好い加減に書かれることはない。是が大事なことである。法華經を讀むとか、或は遺文錄を讀むとかいふことは誠に結構のことであるが、之を色讀せずして、口に有り難き經文などを唱へながら、自己の身が修まらず人に迷惑をかけるやうで何になるのか。これは畢竟口では極樂を讀んで居るけれども其心で讀ます、心で讀んでも身に讀まぬ故である。上人は痛切にその事を說かれて居る。凡そ上人の一言一行は活きた法華經である。肉がぴち〳〵して居る法華經である。併しこれは上人のみに限つたことではない。吾々が眞にそれを信じて行つて行けば法華經の顯現となることが出來る。かやうに上人の說かるゝ所は現實的でありますが、是が哲學上の言葉で言ふ現象卽實在であつて今日最も進步した學說であります。從來の哲學は現象と本體とを別々にして居りました。カントの哲學にも「ヌメナ」と「フェノメナ」とを別に

して說いてある。併し最近進步した哲學は一元論であつて現象と實在とはさう區別すべきものではない。現象があるから實在があるのと共に實在があるから現象があるのである。されば現象を離れて別に實在があるのではないと云ふ說き方をして來たのです。遠い六百餘年の前にそれを口で說かれて居るのみでなく具體的に信仰し實現された人は日蓮上人その人である。是れが上人の最も偉大なる特色の一と見て宜しい。此外未だ上人の思想は發達的であり、批評的であり、具體的であると云ふやうに色々擧げて御話することもありますが、時間も參りましたし、今申しましただけのことが最も重大なる特色であります故以下は略して置きます。

それで日本人は島國の人であつて、前に述べたやうに兎角深遠なる思想には不適當であるのです。併し是れは決して我國民を卑むのではない。島國の人の天性として「プラクチカル」に傾くといふことは一般の通性であります。然るに日蓮上人は此小さな島國に生れて、さうして深遠なる大陸の哲學、宗敎等を味識し消化され更に步を進めて印度に於ても支那に於てもまだ現すことの出來なかつたことを我國に實際に現はされたのであります。されば上人に依つて、佛敎の理と事との區別が現實化され其處に日本人の思想の特色を充分に發揮することが出來るやうになつたのであります。茲に於いて又佛敎が日本的のものとなりました。併しこれは佛敎が日本人の專有となつたといふのではない。日本人の一體の傾向を有つたものとなつたといふのであります。是に於て世界的佛敎が國家的になり、あらゆる抽象的の敎が具體的になり、消極的のものが積極的になつたのであります。

最後に現代の思想と日蓮上人と云ふことに就いて一言致します。諸君、殊に靑年の諸君、今學問をして現代の思想に最も觸れて居る諸君は考へて御覽なさい。現代の思想で最も人をして首肯せしめ滿足せしめ、さうして

人を正しい方向に導いて行くところの思想は何でありませうか。その思想はどうしても統一的でなくてはなりません。個々別々に滿足を與へるものでなく、必ず多くの異つたものから一つの目的點を發見して、すべてを統一し得るものでなければならぬ。實に上人は六百餘年の前に現代の要求を滿足さすべきところのものを發揮されたのです。又現代の要求することが積極か、消極かと云ふことを考へて御覽なさい。此强い世の中に於て積極的の思想を有たずして、どうして生存を全うすることが出來ませう。どうして國家の天職、國民の運命を發展させることが出來ませう。是も六百餘年前に上人の說かれた思想であります。諸君、今日に於て最も危險で吾々の心を寒からしむるところのものは何でありませうか、國家の天職を忘れてしまつて、日本人が日本の國家を顚覆しやうと云ふやうな、幾千年來曾て無いやうな危險の思想があるではありませんか。此思想を絕滅してしま

ふには權力を以てしても駄目であります。思想はたゞ思想に依つてのみ絕滅せしめることが出來ます。又信仰に依つてのみ絕滅せしめることが出來ます。然らば今日の危險思想を絕滅せしむべき思想は何でありませうか、日蓮上人の說かれたやうに眞に國家の天職を大思想、大信仰の上に認めるものに依つてのみ之を救ふことが出來ます。私は現在に於て國家的と云ふことは何の方面に於ても必要なことゝ考へます。それから又一方に於て個人主義と云ふことが殊に大事であります。一體現代は子弟が親に背き、或は傭人が主人に背き、下の者が上の者を冒すと云ふやうなことが澤山ある。それは何故起つて來たかと云ふと、詰り現代は個人の力を一般が認めるに至つたのに拘はらず、上に立つ者が下に在る者の人格を無視するから起ることが多いのであります。此際に當つて各自が自己の尊貴なることを知つて互に尊敬し合ひ個人主義が善き意味に於て發達することは國家の上に取

つても非常に大事なことであります。これは六百餘年の前に於いて日蓮上人が既に力說されたことであります。徒に空理空論に馳せて、世の中の人に解せられぬやうな思想や、信仰は害があるとも利はない、即ち具體的實際の生活に觸れて其生活を立派なものにして行くところの敎でなければならぬ。此意味に於て西洋にも主知主義が排斥せられて主意主義が起つて來ました。是れ亦遠く六百餘年前に日蓮上人が說いて居られるのであります。是等のことを考へて見ると、日本の至るところに天晴會が盛に起り、種々異れる信仰を有する人も相提携して日蓮上人を研究するに至つたことの偶然でないことが御解りになるであらうと思ひます。私は諸君と共に益々研究の歩を進め日蓮主義の特色を發揮せんことを切望致します。

其乃往を移す

余は今より十餘年前長野縣師範學校に奉職したことがあつた。其の頃同僚の漢文科敎師に高遠藩の老儒高橋白山先生があつた。先生は現在の東京帝國大學敎授高橋作衛博士の嚴君であつて其の學德の感化は縣下に徧く信州の敎育家で白山先生を知らぬものは無く知つて敬慕せぬものは無い程であつた。余は就任の初先生がかゝる名家であることを知らずに唯尋常一樣の同僚として面したのであつたが一見して蓋を傾くるに至つたといはうか意氣相投合したといはうか眞に十年の知己の如く直に相敬愛して交際するに至つた。その時余は十年自恨相知晩學德魏然老白山といふ句を贈つたことを覺えて居る。然れどもその交りや短かつた。余は事を以て京に歸り先生と相見ること漸く疎なるに及んで先生は木に就かれた。

その後數年余は先生に於けるが如く傾倒する友を得なんだのであるが一昨年に至り日蓮上人を介して田中智學氏と相知るに至つた。氏と相知るの初より相知るの後の今に至るまでその交情は宛として白山先生に於けるとと異る所はない。余は白山先生を喪ひし惆悵の情を巴雷先生に由つて取り返へし得たのである。その感想は實に十年自恨相知晩をである。一昨年夏三保松原なる氏の最勝閣に一場の講話の依頼を受けて往きし以來余は最勝閣の自然と人とに多大の興味を有し東海道を往復する毎に事情の許す限りこを訪問して色心二者の修養に資して居る。

最勝閣に於て何時も余の起臥する二階東面の見晴らし良き室――書も及ばぬ不二の靈峯を窓一面に容るゝ海内無双の風光を有する室の榻上に巴雷先生の筆にて「移其昔」の三字を認めた額が掲げてある。余はその出典を知らなんだのであるが如何にもその意味を面白く思うてこの額に對する毎に種々の感想に耽つて居た。後この事を清水龍山氏に話してその出典を問うた。氏は直ちにそれは御遺文の三大秘法禀承事中にある「有德王覺德比丘の其乃往を移末法獨惡未來時、敕宣幷御敎書を申し下して尋似靈山淨土最勝地可建立戒壇者歟、可待時耳」とある文句から取つたのであらうとて御遺文録を開いて示された。余は之を讀んで一層額面の意義の深遠なることを知り無限の感に打たれたのである。その感想の最も痛切なるは巴雷先生が最勝閣を三保に樹てた精神に接着したことであるがこゝには其の乃往を移すの語を廣く取り眞に今日に乃往の移されたる種々の事實を擧げて自己の修養に資したいと思ふ。古人が歴史はくり復すものであるというたがそれは外形から見た所であつてその精神から見れば過當未三世を一貫した眼に見えぬ絲遊(ゴッサマア)があつて乃往(むかし)をそのまゝ現在(いま)に現はし現在をその儘未來(のち)に現はすのではなからうか。乃往靈山の大會に現はれた諸佛菩薩は長へに宇宙

に存在し今現にこの世に吾々の眼前に談笑して居らるゝのではなからうか。今の世は如何にひいき目に見ても宗教や道徳が盛んに行はれて人々が立派に其道を履み行つて居るとはいはれぬ。或る意味からは濁悪の世ともいへやう。併し娑婆は卽ち寂光の淨土である。煩惱は卽ち菩提である。この濁悪の世にも乃往の麗はしき光のそのまゝ移されて無い筈は無い。君臣の間に存する情誼は近來次第に薄くなり終には忌はしき無政府主義者さへ生ずるに至つて心ある者をして憂慮措くこと能はざらしめたのである。然るに畏くも　明治天皇陛下崩御先後の國民の赤誠は如何に發露したか余は無數の群集が二重橋前大地にひれふして天に祈り地に禱りて　陛下の御回復を希ふ切なる情の現はれた寫眞を見る毎に熱涙の双頰に傳ふるを覺えぬことは無い。乃往の臣民が君主の崩御に對して考妃を喪へるが如くに悲んだといふことは我國の歴史に見る所であるがその精神がそのまゝ今日に移されて

かゝる現象を生ずるに至つたのではなからうか。余は實に　先帝の崩御に由りてその乃往の移されたことを痛切に感じたのである。

又數週前文學博士元良勇次郎氏の病大に革まるの報一たび新紙に現はるるや、氏の敎を受けし者は舊となく新となく期せずして病院に集まり晝夜詰め切りてその小康を得るまでは何人も眠食を安んぜず眞に衷心の誠より案じ煩ひ出來得る限りの力を盡したのである。それも一日二日のことではなく數日の間各方面に忙しく活動して居る舊門下生等が集ひ來る顏にはいづれも言ひ知れぬ憂の雲がかゝつて居た。而かも少しにても體温上れば我身の事の如くに悲み、少しにても食物を攝取せられたりといへば我親の事の如くに欣ぶ狀は眞に人情の麗はしさの限りを盡したるものであつて余は此の光景の中に在つて幾度か人知れず泣いた。乃往より師に事へた弟子の美談は數多く記錄に存して居る。就中朗師の祖師に於けるが如きはその最

も著名なるものである。この精神はそのまゝ大正の今日に移されて東京帝國大學の元良先生の病室にあらはれたのではなからうか。

余は最勝閣を訪問する毎に種々の强烈なる感動を受けることは前にも述べた通りであるが殊に師弟の間の禮儀と情誼との深厚なる有樣を目前に見て深い〳〵感慨に耽らぬことはなかつた。巴雷先生に對する長瀧氏山川氏以下諸弟子の態度は眞に修身の敎の活模範である。世人が口を開けば世が澆季であつて弟子が師を尊敬せぬといふやうなことをいふ。中には敎師其人が之を以て弟子を非難する唯一の武器として居るが如きものさへある。併しこれは確かに間違つて居る。假令弟子の方に惡るい所があるにもせよ敎師自らが己れの不德不深切を棚に上げて置いて弟子のみを責むることは決して出來ぬ。弟子が先生を尊敬するもせぬもつまりは先生の人格に在る。現に一般に澆季と言はれ最も亂れて居ると言はれて居る師弟の關係が三保

の最勝閣に於ては昔の美談をいくら擧げて來ても決して劣らぬ程の美談がいくらもある。是れ明かに六百餘年の乃往の身延山に於ける師弟の關係が最勝閣に移されて居るのではなからうか。

最勝閣に於てはたゞ師弟の關係のみではなく一般の信仰狀態特に能化の巴雷先生に對する信者の態度といふものは實際を見ねば想像も付かぬほど敬虔であり深厚である。從來一般に我國今日の人は信仰が薄い敬虔の念が乏しいというて居つたがこれ亦皮相の見でつまり信仰を呼び覺まし敬虔の念を起さしむべき能化の師家の無い爲めに各人の奥に潛んで居る是等の心が現はれなかつたのであらう。最勝閣には信仰の爲めに財產は愚、眞に不惜身命の人が充ちて居る。又茲に全國から集ひ來る人々の中には巴雷先生の爲に身命財產をすべて投げ出すといふ者がいくらもある。就中最も吾人の感を深からしめたのは一昨年夏期講習會の最勝閣で開かれた時に洪水風

雨の難を事ともせず八十餘歳の老媼が遠く樺太から單身で參會した事である。この老媼は今年も先月同閣で營んだ先帝の爲めの大法會に孫を連れて參拜した。余は之を聞いてゆくりなくも千日尼がはる〳〵遠い佐渡島から身延に詣でた事を思ひ出して言ひ知れぬ感に打たれた。果してその乃往を今に移す事實があり身延が至る所に存在し得ることを的確に信じた。

六百餘年の乃往、祖師が熱烈に獅子吼して世を警醒せられた時分には獰猛に反對して來る他宗の僧徒が一塲の法論で攝伏せられ直ちに心を翻して熱心なる妙法の信仰者となつた例が多かつた。かゝる現象は濁惡の今日には無いかと思ふ者もあるかも知れぬが決してさうでない。清水龍山氏が先年叡山に留錫して居た頃共に法論を上下した禪宗の僧侶で氏の說に感じ氏に由つて改宗した人がある。山川智應氏に非常に反抗の態度を取つた人でその說に歸服して敬虔なる妙宗の求道者信仰者となつた人がある。此の如

く擧げ來れば乃往を今に移した事實は決して少くない。かゝる事實を生せしむる能化は何れも久遠本佛の顯現である所の日蓮上人の分身である。昔をそのまゝ移した幾多の小日蓮である。何人の心にも久遠の乃往から脈々の靈氣が通つて居つて何時でもそれを今に移すことが出來るのである。それには敬虔なる信仰と熱烈なる慈悲とがあれば誰にも出來るのである。

昔から朋友の交といへば管仲と鮑叔とを擧げて模範的事實として居るが是れも亦決して今日に於て認められぬことではない。友情も師弟の關係の如く今日の如き澆季の世には到底昔の如き麗はしき友誼は認められぬやうに考へて居る者も少からぬやうである。併し遠く例を探索するまでもない。吾等の目前に絕えず表はれて居る姉崎嘲風氏と高山樗牛氏との交情を觀察すれば乃往がそのまゝ移されて居ることが極めて明瞭に分る。余は樗牛氏の生前にはたゞ丁酉倫理會員として相知つて居つたのみで樗牛會員として

故人の爲めに盡すといふ程の親しい間ではなかつた。併し嘲風氏の優しく麗はしい友誼に動かされて自から望んで樗牛會員となつた。此後幾分にてもこの亡友の爲めに盡す嘲風氏の崇高なる仕事を助けたいと思つて居る。智學氏は勅敎頌讃の中の朋友相信に於て「世の鑑てらす心の友垣や不二の高山月のあね崎」と嘆美して居る。余も實に同感である。

想へば余は何たる幸多き者であらう。四十五年の間世界萬國の古來の明主の美點を集めて現代に移したる　明治天皇の聖代に生き多くの敬慕すべき師友に取り卷かれ主觀的には眞に寂光淨土の生活を營み得るのである。白山氏を初め元良氏も巴雷氏も龍山氏も智應氏も嘲風氏も余は眞實に乃往の諸佛菩薩の現代に移されたものであると信じて居る。されば余は決して現代を悲觀せぬ。否何時の世でも此くして乃往の移されたことに氣付きて人の美點長所を尋ぬれば必ず光明に接着することが出來る。徒に乃往を尙

びて現代を卑しみ或は自己が現代にありて現代の責任者たることを忘れて現代を罵倒し、自ら努めて現代に寄與することを怠る者は確かに恥を知らざるの徒である。而かも乃往の美事善行に優るほどの行爲が現代人に由りて目前に行はれ乃往の奇蹟妙行に過ぐるほどの事實が周圍にある人々に由りて現實に成されて居るにかゝはらず之に氣付かずして疑ひ惑ひ自ら進みて之に傲ふことをなさゞる者は傲慢なる愚人である。況して先輩長者の缺點短所をのみ把羅剔抉して喜ぶが如き者は憐むべき小人である。古人の句に「啄木鳥の枯枝探す花の中」といふのがある。彼は人間の啄木鳥である。標準の立て方に由りては如何なる人にも非難を加へることが出來る。花を見ずして枯枝の蟲の孔を探す人物は憐むべきである。

余は友人の居宅にかゝげられた額面の文字に由りて示唆を與へられ終に爰婆卽寂光の妙理を現實に看得し久遠本佛の無量壽なる確證を捕へ得た。

思へば之も乃往の佛菩薩の余の心に移りて余を導き給はりし恩惠であらう。

心理學上より觀たる **日蓮上人** 終

大正三年四月十日印刷
大正三年四月十三日發行

心理學上より觀たる 日蓮上人
定價金壹圓六拾錢

著者 高島平三郎
東京市本郷區駒込西片町十番地

發行者 河本龜之助
東京市麹町區平河町五丁目卅六番地

印刷者 河本俊三
東京市麹町區麹町二丁目九番地

印刷所 洛陽堂印刷所
東京市麹町區麹町二丁目九番地

不許複製

發行所 東京市麹町區平河町五ノ三十六
振替貯金口座東京二〇九一四番
洛陽堂
電話番町四二五八番

洛陽堂圖書目錄

元良、高島、永井、富士川、藤井、唐澤、倉橋、石川合著

◎兒童學綱要

定價金壹圓八拾錢
送料金拾貳錢

高島平三郎先生著

◎兒童を謳へる文學

定價金壹圓
送料金八錢

高島平三郎先生著

◎現代の傾向と心的革命

定價金八拾錢
送料金八錢

高島平三郎先生著

四版出來

教育に應用したる

兒童研究

菊版六百六十頁餘
總クロース天金箱入
定價金貳圓八拾錢
送料金拾貳錢

本書は我が邦兒童心理學の泰斗として汎ねく世に識らるゝ高島先生空前の大著述なり、所說頗る明快にして幽邃なる學理は恰も坦道に據つて絕景を探る如く極めて平易何人も先生の溫情溢るゝ講演に接するの感あり、敎育者は固より兒童を有する家庭は之に由りて一大寶典を得たり、各種專門學校中師範高等女學校等敎育實際家の好羅針、就中玩具、童話、幼稚園の研究の如き眞に斯界の珍にして前人未發の卓見に饒めり

目次大要

第一章 兒童と人生
第二章 兒童の意義
第三章 兒童の身體
第四章 嬰兒の心
第五章 幼兒の心
第六章 少年少女の心
第七章 青年處女の心
第八章 結論

發行所 東京市麹町二丁目二番地 振替東京二〇九一四番 洛陽堂

高島平三郎先生著
◎家庭及び家庭教育　定價金九拾五錢　送料金八錢

高島平三郎先生著
◎心理百話　定價金六拾錢　送料金六錢

高島平三郎先生著
◎女の心　附錄　嫁と姑　定價金四拾八錢　送料金四錢

米國ケーラス博士著
高島平三郎先生閲　石川弘譯
◎家庭に於ける兒童教育の理論及實際　定價金七拾錢　送料金八錢

終